

すると、雌成虫では全体表および尾部への付着によって死亡率が高く、頭部への付着では低かったが、ほ場においても尾部からの感染がかなり多いであろうと考えられる。しかし、菌の濃度との関係についてはさらに検討する要がある。

於保ら(1961)はニカメイチュウおよびサンカメイチュウの体液中に接種された黄きょう病菌分生胞子の発芽管の伸長速度は蛹化期が近づくにつれて急激に大きくなると報じている。

ほ場観察の結果からすると、ツマグロヨコバイにおいても菌の寄生による死亡個体は成虫に多く中令幼虫にはあまりみられなかった。また、黄きょう病菌接種の結果からしても、雌成虫体では分生胞子の発芽伸長速度が最も大きかったことなどから考えると、本病菌に対する本虫の抵抗性は虫態によって異なるものようである。また、ツマグロヨコバイのある世代における黄きょう病菌による死亡は次世代に影響するところが大きいことにもなる。

田村(1964)は北陸地方のツマグロヨコバイの誘殺成績を検討し、「本害虫の発生予察を正しく行なうためには発生と気象の相関以前の問題があり何が根本的な研究が欠けている。」と指摘しているが、今後における本虫の

予察精度向上および生物的防除法解明のためには昆虫病理学分野からも究明を要する多くの問題があるように考える。

IV 摘 要

1) ツマグロヨコバイは1964年の秋期に多くの死亡がみられたが、それは黄きょう病菌とフザリウム菌によるものであった。

2) 黄きょう病菌による死亡は接種後3～5日めころで、分生胞子の付着部位からすると雌成虫の全体表および尾部への付着は死亡率が高く頭部のそれは低かった。中令幼虫の全体付着では死亡しなかった。

3) 分生胞子の発芽伸長速度は虫態によって差がみられ雌成虫区が最も大きかった。

引用文献

- 1 青木清(1956)昆虫病理学:49~51, 技報堂, 東京
- 2 森本徳右衛門(1952)高知大学学術研究報告1:
- 13 3 於保信彦・安田壮平・深谷昌次(1961)応動昆5(2):109~113. 4 友永富・高島敬一(1961)北陸病害虫研究会報9:22~24. 5 田村市太郎(1964)農及園39(3):511~514.

ニカメイチュウ第1世代の薬剤防除がクロカメムシ卵寄生バチにおよぼす影響

友永 富*・山本公志*・田中正之**

(*福井県農業試験場・**坂井農業改良普及所)

Telenomus Gifuensis Ashmead はクロカメムシのかなり有力な天敵であるが、ニカメイチュウ第1世代の薬剤散布がこの卵寄生バチのはたらきにいかなる影響があるかを検討した。

サクシオンキャッチャーによる調査では寄生バチは6月第5半旬ころから水田雑草地で捕集されて、7月下旬にはほ場でかなり多くの活動がみられ9月第6半旬まで観察された。

ニカメイチュウ第1世代の薬剤散布を第1回発が最盛期10日後(6月30日)に1区5アール3連制でBHC

3.0%やホリドール1.5%粉剤をアールあたり0.3kg散布したほ場で、7月10~12日の3日間にわたってクロカメムシ卵を(各区6~7卵塊あて5株おきに株ぎわ10cm高に配置)接種したところ、寄生バチの寄生卵粒率は無散布区35.4%、BHC区23.2%、ホリドール区8.8%であった。

これらの試験を通じて、こんごは天敵を考慮した低毒性薬剤の開発・薬剤散布の時期等が究明されなければならないと考えられる。